

日付:2016年6月12日／聖書:サムエル記上17:41～54

説教:「ダビデとゴリアテ——不条理な闘いはなお強いられている」

舞台はイスラエル人対ペリシテ人の対決である。しかしこの戦い、あまりにも不利で偏った力関係である。ゴリアテは、身長が3メートルもある巨人で、60キロもある鉄兜と鎧を着こなし、鋭い剣を振りかざし、百戦錬磨の戦争の達人である。方やダビデは、まだ少年であり戦などやったことも見たこともない羊飼いであった。完全防備のゴリアテが、剣を振り回してかかって来る中、ダビデは獅子や熊を倒した石投げの石で立ち向かうのだ。だがその投じた石が、鎧の隙間をぬって命中し、巨人のゴリアテが倒れた。ダビデは見事勝利し、イスラエルに平和をもたらしたのである。

この「ダビデとゴリアテ」の物語から何を聞いていくというのか？ 一つは、ダビデ同様、イスラエルの王サウルも、民も、生ける神、万軍の主を信じる者たちであった。しかし、現実には巨人ゴリアテが彼らの前に現われた時、彼らの信仰は、敵にいどむほどのものではなかった。ダビデはゴリアテの巨大さを知らないわけではない。また自分の無力さを知らないわけでもない。ただ彼はその状況にあっても、主なる神の名を信じたのであり、その神の名によって立ち向かって行ったのである。どんな現実が私たちの前に立ちはだかったとしても、全能の主を信じ、主により頼むダビデの信仰に教えられたい。

二つは、当時のイスラエルはペリシテの支配下にあった。サムエル記上13章19節「さて、イスラエルにはどこにも鍛冶屋がいなかった。ヘブライ人に剣や槍を作らせてはいけなないとペリシテ人が考えたからである。」それは何を意味するのか？ ペリシテ人は、最強の鉄の兜、鎧を装備し、盾と矛を備えていた。当時の最新兵器である。方やイスラエルは、金属加工する設備、鍛冶屋はなく、兵器というものを備えることが難しい状況にあった。イスラエルの戦う道具と呼べるものの多くは石と棒ぐらいのもの。その状況は、現在のイスラエルとパレスチナを入れ替えたのと全く同じ状況である。ちなみにパレスチナとは「ペリシテ人の土地」という意味を持つ。ならば現在のイスラエルは、今一度ダビデの言葉を思い起こさなければならない。

最後にもう一つ。この「ダビデとゴリアテ」の戦いは、沖縄の長年の基地闘争と似ている。ここに恩納村喜瀬武原の闘い(1988～89年)がある。恩納村を象徴する山、恩納岳に都市型戦闘訓練施設の建設、また実弾射撃訓練も県道104号線越えで行われ、村民上げての阻止行動である。この山は、村民の命そのもの。山の恵みにどれだけ助けられたか。豊かな水、豊かな緑が命を育ててくれた。この闘いを表した詩がある。

山は心のささえ 山死なば 村も死す 山死なば 我が身諸共  
我が身死すとも山守れ わが心の富士恩納岳  
山清き、水清き 心のふるさと恩納岳  
見殺すな恩納岳 戦世の思い忘れるな  
山死して国栄え 山死して村滅ぶ 許すまじ国の横暴

建設工事を阻止するために村民上げて座り込んだ。また、県道104号線越えの実弾射撃を阻止するために山に入り、のろしを上げた。火を焚き煙を上げて、ここに人がいることを示し、実弾射撃を阻止する。命がけで山を守った。それでも米軍は、そののろしを見てみぬふりし実弾を撃ち、村民に怪我人も出た。そういうまさに命がけで、この闘いに勝利して行く。あの「ダビデとゴリアテ」の闘いのようにも見える。

昨日、沖縄「恨(ハン)之碑」の追悼式が行われた。式の最後に、沖縄ミュージシャン海勢頭豊さんがこの恩納村の闘いに贈った「喜瀬武原」を歌ってくださった。実は、来週の日曜日に行われる県民大会で海勢頭豊さんがこの歌を歌うと言う。それは、先日、元海兵隊の軍属に殺された二十歳の女性が遺棄されたのは、この恩納村喜瀬武原で県道104号線沿いの雑木林である。喜瀬武原の闘いがまだ終わっていないように思われ、この歌を歌って行くという。

「ダビデとゴリアテ」の闘いは、この世においてなお続く。不条理な闘いが強いられている。私たちはその現状に向き合いきれるか。万軍の主を礼拝する者よ、なお王サウルのように、イスラエルの民のように尻込みする者か。私たちは、主なる神が共に居てくださるということ信じ切れるのか。不条理な闘いが強いられている中で、私たちにの平和の歩みを担わせて頂こう。(神谷)